

ごあいさつ



芳川豊史教授

皆さん、こんにちは。

これまで大きな問題もなく、我々、名古屋大学呼吸器外科が着実に前進できておりますのも、我々を支えてくださる周囲のみなさまのおかげと感謝しております。

私自身も、2019年9月1日に名古屋大学呼吸器外科チームを預からせていただいてから、早いもので、5年半が過ぎようとしております。

さて、名古屋大学呼吸器外科の使命は、臨床、教育、研究の3本柱です。東海・中部地方の核となる名古屋大学、そして名古屋大学医学部附属病院として、高いレベルで、かつ、バランスよく、この3つの使命を全うできるように、日々励んでおります。

現実的には、我々は、臨床系の講座ですので、まさに、臨床を第一にしておりますし、今後もその方針に変わりはありません。また、何を行うにも、「人」の力が最も重要ですので、「人」の育成という意味で、教育を次の重要課題としております。どうしても研究が最後になりますが、興味をもって研究を行うことは、様々な活動へのモチベーションとなりますし、学問の府である大学の重要な使命と考えております。

それでは、恒例に従い、現況報告をさせていただきます。

名大病院呼吸器外科の全身麻酔手術数は、毎年増加しておりましたが、本年は、過去最高の年間500例の壁を突破しました。原発性肺癌の症例数は311例と2年連続300例を超えました。内訳は低侵襲（内視鏡）手術が、406例と、全手術の約8割でした。低侵襲手術は、胸腔鏡手術（VATS）を軸に、ロボット手術（RATS）を得意にしておりますが、RATSの症例数が毎年増加しており、本年は261例（肺手術217例、縦隔手術44例）と国内最多レベルに到達しております。

手術においては、低侵襲な内視鏡手術（VATSやRATS）での対応を常に考えますが、大学でしかできないような進行性の腫瘍性病変に対する拡大手術など、根治性や安全性を第一に、開胸手術でのアプローチも行っております。また、胸壁合併切除、気管支形成、血管形成などの拡大手術も多く、同門である心臓外科教室との連携を武器に、縦隔腫瘍や肺癌の手術を安全に行っております。さらに、耳鼻科、整形外科、腹部外科などの様々な診療科との共同手術も継続して行っております。

また、肺移植実施施設に認定され、脳死肺移植適応評価のための患者さんの受け入れを始めてから約1年半となりますが、脳死肺移植の累積登録患者数も20名を越えました。海外や国内の肺移植実施施設で臨床トレーニングを受けた仲間が続々と名大病院に戻ってきており、肺移植のシミュレーションもより現実に即して行い、いつでも移植できる体制を整えております。

教育面では、外科医離れが進む流れの中で、関連病院と一体となって、研修医および学生の教育や勧誘を進めております。その一部は、教室のホームページ（<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/kokyuukigeka/>）でも公開しております。この5年半の間に33名の新医局員を迎えることができ、全国屈指の入局数と存じます。しかしながら、名古屋大学は、愛知医科大学（呼吸器外科 福井高幸教授）や愛知県がんセンター（呼吸器外科 坂倉範昭部長）などの中核病院をはじめ、中部地区に

多くの関連施設を有しており、未だ呼吸器外科医が不足しております。今後も、継続して仲間を増やしていきたいと思っております。

研究面では、科学研究費やAMEDなどの競争的資金に積極的に応募して研究を進めております。現在、数本の科研費(B、C、若手)を獲得し、忙しい日常臨床の合間を縫って研究を行っております。例えば、豊富な臨床データや臨床検体の解析を含めた研究、エクソソームなどに着眼した分子生物学的な研究、変形シミュレーションなどの外科手技に関係する研究や、気胸に対する新規治療法の開発、腸呼吸など、さまざまな研究を行っております([研究について 2024年6月 | 研究について | 呼吸器外科について | 名古屋大学大学院 医学系研究科 呼吸器外科学 \(nagoya-u.ac.jp\)](#))。

最後になりましたが、これからも、名古屋大学呼吸器外科を中心として、25を超える関連病院の同門一同が力を合わせて、より良い呼吸器外科医療を確立すべく、日々努力していきたいと存じます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。